



【特集】 行吉学園創立70周年記念公開フォーラム
「あなたとわたしの国際協力—地球市民として多様な参加を求めて」

基調講演 ● 市民参加型人道支援外交の提言

AMDAグループ代表・医学博士 菅波 茂

みなさん、70周年おめでとうございます。AMDAは、今は国連NGOとして色々がんばっていますが、私自身は18歳の時に岡山大学に入りまして、以後留学等全然しておりません。で、現在のよ
うな活動ができるということですね。何を言いたいかと申しますと、グローバルとローカルという2
つの言葉がありますが、ローカルに徹底的に見つめていって、それをグローバルに展開するというの
が、本当は一番わかりやすいんですね。グローバルに考えて、ローカルに何をやるかということが昨
今非常に言われていますけども、私の考え方はそうでなくて、自分とは何者であるかということ徹
底的に見つめて行って、そのエッセンスでもってグローバルにやって行く方が相手の人がわかって
くれるということ。すなわち、国際協力と言っても、最終的には「わたし」と「あなた」の関係しかな
いわけですね。その中でいろんなものが積み重なっていくということが、26年間やってきました結果、
言えることなんです。その中でも、今まではこういう国際協力というのは、専門家の人たちがやるん
じゃないかなということが言われていますが、そうじゃないんじゃないかなということをひとつ申し
上げたいですね。それは私たち日本という国の位置づけと、私たち日本人というものがどういった
存在であるかとうことをどんどん突き詰めていければ、市民が先頭に立ってやっていける人道支援と
いうのが、非常に可能性があるということを紹介しておきたいということ。それから日本という国が
これから国際社会でどういう役割を果たせるかということも併せて紹介しまして、行吉学園の創立70
周年から、また80周年、100周年と進める時のひとつの参考になればありがたいということです。

【日本が国際協力できる3つの理由】

日本人が国際協力で、ここにおられる神戸女子大学の
学生さんがそのまま海外に出て行っても、もう立派に通
用するということ含めて申しますと、1つは、日本とい
う国は世界で一番嫌われてない国なんですね。どんなに
自分が困っている人を助けようと思っても、相手の人が
気づいてくれなかったらそれはできないんですが、これ
はBBCが調査した結果ですが、日本人であるということだけで相手の国の人が受け入れてくれると
いう事実があります。今、香港で世界の人たちのパスポートが闇で売られます。一番値段の高いパス
ポートが実は日本のパスポートなんですね。値段はだいたい1件が30万円です。ある国のパスポート



は誰も買いませんし欲しがりません。なぜ世界の人が日本のパスポート、これ盗まれたパスポートですけども、30万円も出して買いたいのかというと、それだけ日本というのは世界の人たちから嫌われてない好かれている。そして日本という国のパスポートがあればどの国でも入っていけるわけですね。パスポートには何が入ってるかというと、このパスポート持っている国民を保護してくれという要請が、日本の国家からこのパスポート見た相手に言っているわけですね。わりと日本のメディアというのは、日本という国のことを低く紹介していますけども、実際に香港の闇市で売られているパスポートの値段は日本が一番高いことは、それだけ日本という国が評価されてるんだということでもあります。

それから、私たち日本人は海外のことを非常に知りたがりますが、それ以上に海外の人は日本のことを知りたがっています。ここのところが一番大きなギャップになっています。そして私たちはとかく海外に留学して行って、何か私たちにとっていいことはないかということで一生懸命勉強して帰って来んですが、行っている向こうの国たちの人が実は日本のこともっと知りたいたいと思ってるのに、日本から出ていく人が、向こうの人が知りたいたいことに対して答えることができないわけですね。



なぜかと申しますと、日本人は昔から海外のことを一生懸命勉強するけども、自分たちは何者であるのか、そして自分たちが暮している日本というのはどういう国なのかということ、あまり勉強してないんですね。そこところが残念なんです。

ちなみに海外の人で一番知りたがっていることには3つあります。1つは、どうして日本は島国で、無い無い尽くしの中で平均寿命が世界一なのか、ということをもみんな知りたがっています。日本人はといえば福祉の先進国スウェーデンに行ってみたくとか、ノルウェーに行ってみたく、フィンランドに行ってみたく、デンマークに行ってみたくって言いますが、平均寿命は、世界一が日本なんです。むしろ向こうの人が知りたがっているのはその点なんです。平均寿命が世界一だということは、世界で最も平和な国だという裏返しでもあるんですね。で、このことに答えが出せる人がどのくらいいるかということですね。もしこれに対する答えを持っている、それだけでですね、海外に講師として行ってこのことを教えてあげるだけの価値があります。そして2番目は、今から何年前にこの神戸もたぶん爆撃によって焼け野原になったと思うんですけども、その中で今のような奇蹟的な経済復興を成し遂げますが、世界の人から見たらどうしてそれが可能になったのか、そこをどこを知りたいと絶対に聞かれます。また、アジアの国に目を向けますと、18世紀から欧米がどんどんアジアに行って、インドから始まってミャンマーとかタイとかいろんな地域を植民地にしています。でもアジアの国で植民地にならなかった非常に珍しい国が日本なんです。そうすると、どうして日本は植民地にならなかったのか、植民地にならずに済んだのかと、アジアの人はそこところが知りたいたいということです。この3つのことを分析して答えが出せれば、日本という国がどういう国なのか、日本人はどういうアイ

デンティティを持った人なのかということが出てくるわけですね。これこそ世界の人たちが知りたいことですね。

それから3番目の理由として申し上げたいのは、日本人の常識というものが実は世界の良識であるということ。

ひとつは相互扶助という考え方です。これは「困った時はお互いさま」ということですが、世界の8割の人が相互扶助という考え方がわかりますけども、その相互扶助は自分たちのグループの中だけ助け合うという「困った時はお互いさま」で、自分たちのグループ以外の人たちに対しては非常に冷たい。こういった閉ざされた助け合いなんですけども、日本という国は、ここにJICAの方もおられますけども、そういった日本人の親切というものが、国の隔てなく、宗教の隔てなく、民族の隔てなく世界に、困っている人のためのいいプロジェクトをやっています。すなわち「開かれた相互扶助」というのを国のODAもやっていますし、そして日本人は、困った人がいれば、相手の背景に関わらず「困った時はお互いさま」という、こういう開かれた相互扶助という考え方を持っています。でも世界は違います。自分と相手がどういう関係にあるのか。血の繋がりがあがるのかないのか。宗教が同じなのか同じでないのか。部族が一緒か一緒じゃないか。こういったところで助ける相手を厳密に決めていくわけですね。そして自分にとってどんな見返りがあるのかということを探求していきます。でも日本人はわりとそういうことを求めずに、困った人がおれば助けていくと、こういった開かれた相互扶助なんです。

そして2つ目に申し上げたいことは、日本という国は、人を裏切る必要が国際的にありません。国際間で約束したことは必ず守っていきます。例えば60年前にアメリカと戦争になりましたけれども、戦争の前に日本という国はアメリカから借金していました。日本という国はアメリカと戦争している最中も、そのアメリカから借りた借金は戦争中も返していつているわけですね。ご破算にするということは1回も過去やっておりません。ところが、ロシアという国は非常に大きな国なんですけども、いろんな国から借金していましたけども、経済がうまくいなくなったら一遍ご破算しましょうとか、そういうことをやれるんですね。でも日本は国として裏切ることをやってないんですね。だから日本が約束すれば、必ずやってくれるという国際的な信用力が非常に高いということですね。

さらに、国際社会では自分の国の利益を守るために、「ごねる」ということが美徳になってるんですけども、日本という国は、1人1人の国民から始まって国まで、ごねてはいけない、すなわち、ごねるということは背徳なんだという、こういう文化を持つてるわけですね。こういった世界で最も嫌われてない国、日本とは何か、世界はこういう関心を持っております。そして日本の常識というのは実は、これから世界が目指していくべき道徳的な意味で良識。こういうところがあるんだというところをまず知っていただければ、ここにおられる方全てが今から国際協力に参加されても、もうそれでやって行けるというのが私の考えなんです。

とかく国際協力をやるためにはいろんな専門的なことを知らなきゃいけないんだとか、いろんな特殊な技術を持たなきゃいけないんだとか、そういうことで壁を高くされていますけども、もうそんなことはない。もうこれだけで十分やっていけるんだ、というのが私の今までやってきた素朴な感じで

すね。例えば、幕末に日本が植民地化を防げたということを考えてみましょう。それにはアメリカのオバマ大統領のことをお話しするのがわかりやすいでしょう。オバマ大統領がなぜリンカーンが最初にスピーチにしたところに自分がわざわざ行ってスピーチしたのか、オバマ大統領はどうして自分をリンカーンと常にだぶらせながら選挙運動をやり、選挙が済んだらリンカーンが最初に演説したところに行ったのかという話がありました。メディアは「リンカーンが奴隷解放を出した人だから、オバマは黒人だから、だから行ったんだ。」と、こういう短絡的な紹介していますけど、実はそうじゃなくてですね、オバマ大統領は、"One America"、すなわち、アメリカは1つだと言っているわけですね。なぜこう言ったかという、ブッシュ大統領の、2001年の9月11日から始まった対テロ戦争で、「この戦争に協力する者は味方、協力しない者は敵」という決めつけで、アメリカ国民は2つに分かれたわけですね。それじゃいけないってことでオバマ大統領は歴史を振り返って見たんですね。アメリカが南北戦争によって分かれた国を、南北戦争の後、この国を1つにしてアメリカという国を成し遂げたのが実はリンカーンだと。アメリカの紙幣を見ると、アメリカを創ったワシントンが1ドル紙幣で、一番評価されています。その次にアメリカ国民、市民というコンセプトを作ったリンカーンが2番目の5ドル紙幣なんですね。アメリカでは低額紙幣から貢献度の高い人になっています。オバマ大統領は、今の分かれている国を1つにするためにアメリカの歴史を見て、過去にはリンカーンが同じことをやっていたと。だから自分は現在のリンカーンだという意味でリンカーンと自分をだぶらせて選挙に当選したし、選挙の後「One America」ということを打ち出したんですね。

で、日本のメディアを見ると、こういう解説をした人があまりいなかったですね。じゃあ、日本が18世紀の時になぜ植民地にならなかったのか。じゃあ植民地になったアジアの国はどうだったかと言えば、インドも「One India」という考え方はなかったですね。そしてミャンマーも「One Myanmar」という考え方はなかった中で、日本は18世紀の時にすでに「日本人」というコンセプトを持っていたんですね。じゃあ日本でリンカーンにあたる人は誰なんでしょうか、ということを経史的に帰っていくと、それは徳川家康とうい話になるんですけども、そういうところを、ずっと歴史的に説明してあげるということになった時に、日本という国をもっと理解してくれるわけですね。

こういうことに関連して、平均寿命が世界一にもなる、それだけの、やっぱり理由がはっきりしてきます。そして戦後の奇跡的な経済復興はなぜ可能だったのか、そしてなぜ植民地にならなかったのか、全て論理的に説明ができますし、その分析は日本人としてやっておくべきだし、そしてそのソフトプログラムを逆に海外に持って行くだけで、海外の人たちは私たちの国際協力を大きなスタンスとして認めてくれるという、そういうことなんですね。これを知っておくだけで、私は日本人が国際協力できるだけの素養は十分だという気がしますし、逆にこういうことがはっきりしなくて、ただ言葉が話せるとかだけでは十分ではありません。コミュニケーションする内容というものがやはり一番大切で、別に英語がうまくなくても、向こうが本気で知りたかったら日本の言葉を理解しようと努力してくれます。

【国際協力の3つの前提】

そういったことを踏まえて、日本市民が、国際協力ができる3つ理由というのがあります。まず第1に、きちんと説明するという事です。「男は黙ってサッポロビール」というコマーシャルが非常に受けていますけども、私たち日本人は、いいことをすることに関しては説明しなきゃいけないと、あんまりベラベラ説明すると、この人はなぜ私にここまで自分がしようとすることを説明するのかと、この人は詐欺師じゃないのかと、ぱっと反射的に浮かぶのが日本人のモラルであるしコミュニケーションなんですけども、国際社会っていうのは、ものの見方、考えが違う人たちが一緒に生活しています。その中で困っている人に自分が親切しようと思った時、なぜ私はあなたを助けるのかということの説明しなきゃいけないし、逆に助けてもらう方も、なぜあなたは私を助けるんですかということを実は聞いてくるんですね。あるいは聞かないだけかもしれませんが、このところをはっきりさせないと、今私を助けているこの人は、後でものすごい請求書を私に送ってくるんじゃないかとか、後で信じれないようなものを私に要求するんじゃないかとか、そういった不安感とか、警戒感が出てきます。したがって人を助けたいという気持ちは誰でもありますけども、ものの見方、考え方が違う人に対しては、なぜ私はあなたを助けるのかということをしつかり説明しなきゃいけない。それをどういう形で説明するのかというのが非常に大切ですね。

それから2番目は、援助を受ける側にもプライドがあるということです。このプライドとはどういうことかと言うと、援助を受けている人も、自分も社会から必要とされたい、自分も社会から認められたいという人間としての尊厳を持っているということです。私はAMDAの活動と同時に保健施設という他人の助けがないと生きていけない高齢者の方々の方々の施設を運営していました。で、そこに就職してくる若い人は人一倍人の役に立ちたい、ダイナミックにダイレクトに人間関係をやっていきたいと思って来ます。そして、人の助けがないと生きていけないご老人ですから、その人たちが一生懸命食事の介護だとか、下の世話だとか、入浴などやりますと、「ありがとう、ありがとう」と言われるんですね。そうすると、若い人は「ありがとう」と言われると、自分は必要とされてる、そして自分にとってやはり天職だったんだと喜ぶんですが、逆に「ありがとう」と言ってる人たちも、「ありがとう」と言われたい気持ちがあるということをお忘れしてしまうんですね。

人間というのは「ありがとう、ありがとう」という言葉を一方的にやっていくと、人間としての尊厳が崩れてきて沈黙の世界に入っていきます。そしてお年寄りの場合だったら認知症がどっと進んだりするわけですね。そういう時に、もう10年選手とか15年選手の職員は、そのお年寄りの人に「ありがとう」と言えるような状況を自分で作るんですね。例えば、老人介護の場では、体を拭いたりするタオルとかおしぼりとかたくさん必要になります。若い人がやれば1分間で何本もできますが、脳卒中なんかで不自由なお年寄りに頼みますと、お年寄りはそれをやるのに1分、3分とか5分とか、膨大な時間かかります。でも、してもらった後、職員が「ありがとう」と言ってそれを受け取ると、その時のお年寄りたちの顔というのは非常に晴れ晴れとして嬉しい顔をされるんですね。つまり、お年寄りの人たちは、人から「ありがとう」と言われるチャンスがないわけですね。いつも「ありがとう」と言われているわけですね。その時にプロの職員というのは、自分の方から「ありがとう」と言え

るような設定をしてあげるわけです。

すなわち、援助を受ける側にもプライドがあるということです。これは貧しい国だからといって、「あなた方、困ってるでしょう。で、私たちが助けてあげますよ」ということを一方的にやっていると、その人たちのプライドというのがだんだん傷ついてくるわけですね。お金が続く間は人間関係が続きますけども、だんだんとお金だけの世界のことになり、さらに突っ込んだ関係は築けなくなる。すなわち、「わたし」と「あなた」の関係はお金だけの関係になってしまっ、人間的な深みが出てこないということですね。援助を受ける側にもプライドがあると、援助を受ける側のプライドというものをどう尊重してやるのかということを常に考えないと、単なる親切では意味がないということですね。

それから第3に、血縁共同体社会ということです。これは日本人が一番わからないんですね。もう何十年前のことですが、ドイツが統一される前に西ドイツのシュミット首相が日本に来て、日本人は残念だねと、アジアに友達がいないじゃないかとおっしゃいました。なぜ友達がいないかというと言っていると、日本人は、日本人以外のアジアの国全てが血縁共同体社会であることがわからないからなんですね。日本人はこの血縁共同体社会でどう振る舞っていけばよいのかということが日常的にわからないんですね。日本で唯一血縁共同体社会があるのは沖縄だけです。ここにJICA兵庫センターの向井さん（注：パネリスト）が来られてますけれども、広島にもJICAの研修センターがあって、そこでたくさんの方が研修を受けます。で、沖縄の沖縄JICAの研修センターに行くと、研修生がほっとしますと言われるんですね。なぜだかと言うと、沖縄は血縁共同体の社会的なルールとか慣習とか、人の付き合い方ができるんですね。この神戸だとか私の岡山とかいうと、残念ですけども、血縁共同体の社会の人たちをどう遇すれば、本当に心が開いてもらえるかということが日常的にわからないんですね。でも、世界はこれで動いているんですね。この血縁共同体社会とういものは、いかなる社会かということを理解せずに、ただ困ってるから、ということで支援に行っても、本当に微妙な人間関係のところですれ違いが起こってしまうんです。

この3つはぜひ知っておいてほしいですね。ここにおられる方は全て、今さっきの日本の特徴を自分なりに解釈して出ていくことによって、ウェルカムされますけども、この3点ですね、「なぜ私はあなたを助けるのか」「援助を受ける側にもプライドがある」「血縁共同体社会はどのような社会なのか」、この3つを理解せずに行くと、せっかくのみなさん方の気持ちの100%効果を出さずどころか、50%とか40%とかその辺で終わってしまうのはもったいないということで、こここのところを今日は特に説明したいと思っています。

【人道援助の3原則】

18歳からずっと私は岡山におります。世界の方が言います。「岡山ってどこにあるんだ」と。「どうして本部を東京に移さないのか」と。私は別に移す必要がないし、今のままで十分なんですね。そして留学もしてないし、そして国際結婚もしてないから、国際社会がどういう社会か知りません。知らないけども、岡山はどういうところなのか、そして日本はどういうところなのかというのを、私は徹底的に研究しました。そしてその考えたことを国際社会で応用してくと、1984年に私たちは発足しま

したけども、現在ではアジアのみならずアフリカだとか中南米、カナダ、そしてコソボとかアルバニアとかこういったところに30の支部ができて、いろんな人道支援をやっているわけですね。

じゃあその中でも一番大切なのは、なぜ私がこういうことをするのかという時に、私が知っているのは1つだけということですね、「困った時はお互いさま」という相互扶助しか私は知りません。日本では人権ということが非常に重要な概念だということは私もわかっていますが、人権という概念の反対の概念は、独裁でも何でもなくてそれは神権ですね。神の権利に対して人権というのが出てきているわけですね。中世の宗教が人々の生活を非常に縛っていた。その中で人間にも人間の権利があるんじゃないかということで人権というのが出てきた。そういうような思想の流れがあります。ところが残念ですけども、日本では、宗教がヨーロッパほど人々の生活を縛ってきた、神への忠誠的なものがないんですね。したがって本当の意味でも、人間としての権利である人権思想というのが日本からやっぱり出てないんですね。むしろ日本でずっと発達してきたのが、困った時はお互いさまという相互扶助。これは嘘偽りなく現実の生活の中で私たちがやっています。これを私は一番のコンセプトとしてやってきました。

どういうことかと言うと、これは夫婦関係でもそうなんです。人間の関係でもそうなんですけども、困った時はお互いさま、すなわち困難を共にする人間関係なんですね。困難を解決していく中で、自分にない素晴らしいものを相手が持っているとわかった時に、尊敬という、リスペクトという気持ちが出ます。そして、どんなに困難が激しくても絶対に相手が逃げないということがわかった時に、信頼、トラストという気持ちになります。そして夫婦生活につきましても、私も結婚して36年になりますけども、妻と一緒に子育てだとか病院の経営とか、そしてAMDAとかやってきますと、いろんな困難があります。別に結婚しなくてもビジネスパートナーでもいいのですが、ビジネスパートナーっていうのは逃げることができます。でも結婚生活というのは子どもやなんかできたらもう逃げられませんが、逃げられない中での苦労というのが、本当の真価を発揮してくれるんですね。そういう中で妻が見せてくれる女性としての、男にない素晴らしさを見た時にやはり尊敬。そして倒産の危機はなかったんですけども、倒産に近いようなことが起こっても、絶対に逃げない。普通は倒産とかそういうことになると、「あんたがこういうことをしたから」とか、「あんたがAMDAなんかやってこんなことやるから、本業に影響が出るんだ」とか愚痴が出るんですけども、一切そういうことは言わない時に、ああ素晴らしいと、この人は絶対逃げない人だというのがわかった時に信頼感が出るわけですね。

こうして人間関係ができてきます。それは相互扶助、困った時はお互いさま、これを繰り返していくうちにいろんな方との間にも、尊敬と信頼というのが出てくるわけですね。その時初めて男とか女とか、年齢とかどこで育ったか、生まれたかというものを超えて共栄、共存していける人間関係ができてくるのが相互扶助なんですね。これを基本として私は国際的なネットワークをつくってきたわけです。

そして、私たちは人道援助には3つの原則があると考えております。「人道援助の3原則」ですね。私たちはアジア、アフリカ、中南米の人と仕事をする時、「私はなぜ人を助けるのか」ということをはっきり言います。1つが、誰でも他人の役に立ちたい気持ちがありますよと。これが第1原則ですよな。

私にもあるしあなたにもあるでしょう。第2原則は、この気持ちの前に民族、宗教、文化、国境というものはありませんよ。あなたはイスラム教徒、私は仏教徒、でも人を助けたい気持ちの前にはそういう宗教は関係ありませんよ。あなたはバシュトゥーン族のタリバン、私は日本人のAMDA、でもアフガン難民を助ける身においてはタリバンも日本人もありませんよ。そりゃそうだという話になります。そして第3番目が重要なんですけども、今さっき言った援助を受ける側にもプライドがあるということなんです。これは特に発展途上国の医師たちが、圧倒的にこの第3原則を支持してくれます。例えば、ネパールでいろんな災害があった時、日本のメディアを見ると欧米の団体が入って人を助けているという記事があります。で、私がネパールの支部長に「なんでネパールに災害がある時に常に欧米の人たちががんばって、君たちはがんばらないのか」と言ったら、「何を言っているんですか。私たちが6年間の医学教育を受けて、それなりの倫理と技術を持っている、意欲と能力はあるんだけど、自分たちにはチャンスをくれないのだ」と。すなわち「常に先進国の人たちがリーダーシップをとって、自分たちにはリーダーシップをとらせないんだ」と、すなわち「チャンスをくれないんだ」と、「だから自分たちは結果をだせないんだ」と。すなわち意欲と能力があってもチャンスが与えられなくて結果が出せない。これが差別、ディスクリミネーションですね。差別の反対は反差別とかいういい加減な日本語ではなくて、英語でいえばフェアネスですね。モチベーションがあって、アビリティーがあれば、オポチュニティーを与えられて結果が出せる。もし差別というものがあるれば、これはディスクリミネーションですけども、モチベーションがあってアビリティーがあるにも関わらず、何らかの理由でオポチュニティーを与えなくて、結果が出せない。そうすると発展途上国の医師たちは、人間として他人の役に立ちたい気持ちがあり、なおかつ現代医学の教育を十分受けているにもかかわらず、他の国に助けに行くこととか、自分の国で起こったことでも自分たちにイニシアティブをとってやれるだけのチャンスを貰えない。したがって結果が出せないんだと。援助を受ける側にもプライドがあるというのは、そこから来ているわけですね。

いろんなNGOがありますけども、たぶん援助を受ける側にもプライドがあるという原則を出しているのはAMDAだけだと思うんですね。こうしてたくさんの国々の医師たちがAMDAと一緒にやりたいと。こういう形で1984年に発足してここまで来ているわけですね。で、私たちは現在までに、26年間で、51カ国で123件のエマージェンシー・デリー（救命出動）をやってきましたけれども、これをやるにしても全て日本から出て行ってたんではとてもお金が高つくし、そこまでできないんですね。で、私たちはAMDA多国籍医師団であると。すなわち災害を見た時に、その被災国の医師たちが真っ先にローカル・イニシアティブ、すなわち現地のことを一番よく知っている人たちが、真っ先にコーディネーションをやって近辺の医師たちがそこに駆けつけて行く。こういったシステムをとっていますから、非常にコストが安くあがるし、そして今日大災害が起きたら、もう現地に医師がそこに入っています。そして近辺からそこに駆けつけて行くという、こういう体制をとっているんですね。これがAMDA多国籍医師団ですね。

【血縁共同体社会】

そして医療と魂ですね。だいたいNGOの反対はGOじゃないんですね。NGOの母は宗教団体です。だから欧米の多くのNGOの出資母体は、プロテスタントだとかカトリック、イスラムの国でしたらイスラム教が母体になってたくさんのNGOをつくっています。どこが違うのかというと、宗教というのは魂の永遠性に関する仕事をしています。NGOというのは命の普遍性に関する仕事をしているという点です。普遍性というのはどういう意味かということ、いつでもどこでも誰が見ても命は大切だということ、これが普遍性なんですね。これをNGOはやっていますけども、宗教というものを無視した国際社会はないんですね。なぜか日本は宗教と政治だけは腫れものを触るように教えないんですけども、実際に海外のドクターたちと一緒に仕事をする時は、医師としてのサイエンスと技術だけでは仕事できません。必ず彼らの背景にはキリスト教だとかイスラム教だとかヒンズー教だとかいう宗教のバックボーンがあります。その中でも発展途上国の、血縁共同体の社会の人たちが一番大切にするのが、人間の一生は冠婚葬祭がありますけれども、生きている時の冠婚よりも死んだ時の葬式と、それから祭ってもらえる葬祭で、ここでもって血縁共同体社会は一致団結していくわけですね。したがって、災害が起きて私たちは助けに行きますけども、それでも死んだ人たちがいます。じゃあその人たちに対して、1年後に合同慰霊祭をやるという、この医療と魂のプログラムですね。この合同慰霊祭をやることによって、AMDAというのは自分たちの価値観を共有してくれているんだと、こういう気持ちになってくれます。

で、本当に大切なのは血縁共同体を理解することです。この前ある有名な東南アジアの指導者が死んだ時に、日本でも三流の政治家は送りますけれども、本当は一流の政治家を送る方が向こうの人たちは喜んでくれます。また、沖縄支部という非常にAMDAのためにがんばってくれている支部がありますけども、その支部長が大仲先生という方なんですけど、沖縄の方から私が忠告されたのは、この大仲先生が死んだ時は世界中のどこにしようともあなたは絶対来なきゃいけないですよということでした。もしこれだけの活動をしてきている大仲先生が死んだときに、AMDAの代表であるあなたが来なかったら、もうAMDAは沖縄社会では信用がなくなりますよと、これが血縁共同体の、1つの人間としての義理とか、連帯感の証なんですね。だから私たちは必ず、亡くなられた方の魂のために1年後には日本の宗教家の方と、現地の宗教家の方の合同慰霊祭をやります。これによってまた次に大地震、大災害が起こった時の連帯感が強まってくるわけですね。NGOで直接に魂というものに対してコミットメントしているNGOはありません。特に日本のNGOは、そこはもう禁句だということと避けていますけども、本当は避けちゃいけないんですね。このところに入り込まないと、本当の意味で向こうは迎え入れてくれないという、そういうことなんですね。

【NGOとしての政策提言】

また、私たちはいつでも出て行けるために主に大学と組んで、発展途上国の大学と協定を結んでいます。なぜならば、ひとつには、大学というのは無尽蔵にヒューマンリソースを持っているからです。そして2つ目は、2006年に国連の経済社会理事会で総合協議資格を受け提言ができることになったん

ですが、私たちは国連にこれからいろんな政策提言をする時、大学には研究、政策能力というものがあるからです。こういったたくさんの人が死んだ時にどうやったかという、貴重な人類の歴史というものを講義という形で次の世代に伝えていくことができる。これが大学なんですね。したがって、私たちは個々の医師と契約するんでなくて、大学だとかインスティテューションだということと契約をしまして、世界中のどこで災害が起きても対応できるというシステムをつくっているわけです。でも、なぜあなたを助けるのかというと、それは常に相互扶助、という、このことを理解して下さっているとしか組まないし、理解して下さるところと組んでいくわけですね。こうやって現在ここまで来ております。申し上げましたように、私は日本の常識しか知らないんですけども、その日本の常識が十分世界に通用するということなんですね。

ところで、総合協議資格というのはどんな資格かと言いますと、毎年、国連経済社会理事会というのがジュネーブで開かれます。国連経済社会理事会の他に理事会が2つあります。それは世界の紛争とかを扱ってる安全保障理事会ですね。それからもう1つは人権理事会なんですけれども、ほとんどの私たちの生活に密接な関係を持つてる、子どものためのユニセフだとか、先生方の研究をされる教育・科学というのはユネスコ、難民が出れば国連難民高等弁務官事務所、こういったものは全て国連経済社会理事会ですね。ここで政策提言できるということです。2009年の時には、7つのNGOが政策提言のチャンスを与えられました。私たちは7つの内の1つに入りまして、この席で私は2003年から2006年までスリランカの医療和平について、すなわちスリランカが復興していく時に私たちがそこで活動して、そこでまとめた政策提言、医療和平というものをここでやらせてもらったわけですね。こういう資格があるということなんです。日本人は非常にいい道徳感を持って、一生懸命汗を流して、人のために色々やっているとそれで十分報われていくんだ、そして人々が認めてくれるんだと思うんですが、残念ですけども、国際社会というのはこういう協議資格、メンバーシップによってあなたがそこにいてもいいですよというレジテマシー（legitimacy）が保証されます。だからこういった資格というものは、本当に国際社会でやろうと思うと目指していかなきゃいけないんですね。それは、ただ役に立つということじゃなくて、もっとロジカルにそれをまとめていって、そしてタイピングを出して発表していくという、そういう作業が入ってくるんですけども、日本には本当にいい仕事をしているNGOはたくさんあるんですが、なかなかそこまで詰めていけないためにせっかくいいことをしているんですけども、世界に向かって発表するっていうチャンスを手にされていない。私たちは、国際社会はそういうものだというのはわかっていましたから、22年間かけてひたすらそれを求めてきて、結果として、私たちがみなさん方の税金だとか募金だとかでできたこと、やったことから政策提言として発表しまして、世界の人たちに理解してもらおうというのをやっているわけですね。それが総合協議資格です。

【阪神・淡路大震災と相互扶助】

それで相互扶助という言葉なんですけども、じゃあ日本人がいつ相互扶助ということを全面的にわかったかと言うと、1995年の1月17日に阪神・淡路大震災が起こった時でした。全国から100万人の

ボランティアが集まったということで、ボランティア元年ということが言われましたけども、その時になぜ日本人がかくも100万人も神戸に集まったのかと、それは私たちの潜在意識の中にあった「困った時はお互いさま」という相互扶助のコンセプトだということが言われました。それからわずか5か月後にサハリンで同じような地震が起こった時に、私たちは緊急救援機で、これ2回目なんです、1回目は5人乗りのチャーター機で4時にサハリン州空港に行ったんですね。そうするとサハリンの行政官が出てきて、もう日本の医療はいらぬから帰ってくれと、こう言われたんですね。その時に私たちのチームリーダーがこう説明しました。私たちは単にサハリンの被災者を治療するためにだけに来たんじゃないんだと、わずか5か月前に阪神・淡路大震災でたくさんの神戸市民が死んだり被災を受けた時に、おたくの国が多大な援助をしてくれたと、そして神戸市民も5か月して少し立ち直ってきて、同じようなことがサハリンで起こったので、どういってお返しをしたらいいのか、その調査をしてくれと頼まれて実は私たちは来てるんだということを言いました。すなわち、困った時はお互いさまということの説明したら、800km離れた被災地まで私たちのチームをサハリンの飛行機でどんどん送ってくれるわけですね。そして私たちは調査して、飛行機をウラジオストク空港から岡山空港にチャーターしまして、28tの救援物資と8名の第2次のチームを入れてサハリンに送ったんですね。相互扶助という考え方は国際的にも通用するんだということがわかったのが、このサハリンなんです。

この時にまだ戦争は終わってないと思ったのは、私たちのサハリンでの活動を支えてくれた在留日本人の通訳の方が、この飛行機が行ったことによって胸を張って歩けると言うわけですね。どういうことですかと言うと、サハリンの一等市民はロシア人、二等市民は朝鮮半島の人、そして三等市民が日本人なんだと。ところが人間、血の繋がりがだとか宗教を超えて本当にどんと困った時に、まさかの時の真の友という言葉がありますけども、この時海外から行った救援機はAMDAだけだったんですね。そしてサハリン全土に日本からの救援機来たということが放映されたわけですね。それによってそのご婦人が、これから私たちも三等市民としてではなく、胸を張って歩けると言うコメントを言われたんです。

本当に大切なのは、「あなたは見放されてはいませんよ」ということです。阪神・淡路大震災の時に私たちも経験しましたが、こういった災害の時、自分に何ができるだろうかということのみなさんそれぞれに考えられるかわかりませんが、私たちは1995年の1月17日の午後4時に岡山の私の病院を出発しまして、長田区の中央保健所に着いたのが午後11時半です。その時にびっくりしたのが、保健所の全ての職員が出てきてたんですね。当然あの人たちの家も被災しているにもかかわらず、これは公務員としての義務感なんですね。その中でもどうしていいかわからなかったところへ、私たちのチームは緊急救援に慣れてますから、みなさん巡回診療に行きましょうということをやりますと、みなさんさっと動きました。ところが、長田区は昔の焼夷弾が落ちたようにずっと燃えたそういう中を、市民の方々が浮遊霊のようにうろろ動かれています。医療チームが来ましたよと言われても、なかなか本気にされなかったんですね。何回も医療チームが来ましたよということ言うと、わっと集まられて、そして診察をして薬を渡していったんですけども、これすぐ底を尽きました。

その時に最後はアスペリンという単価にして3円から5円の頭痛薬しかなかったんですけども、それでも被災した長田区の方々は、その1錠を握りしめるようにされて帰られるんですね。私たちがその時思ったのは、こういった災害を受けた時に普通の人々は肉親が死んだり財産がなくなった時、もう自分は神から見放されたのかという気持ちになるということだったんです。これが絶望感ですね。その時に「いや見放されてませんよ」というメッセージがこの人たちにはまず大切なんですね。それはいち早く他の人が入って行って「私たちはあなた方を見放してませんよ」というメッセージを送ることなんですね。そのことを私たちは1錠のアスペリンを長田区民の方々が握りしめたという事実から感じたわけですね。それ以後私たちはできるだけ早く被災地に入ることにしているのです。私たちはなぜ入るのか、どうしていち早く入るのかというと、「本当に肉親を亡くされた人、財産なくされた人が一番考えてるのは、自分たちは見放されたという絶望感だ。そういう人たちに対して、自分たちは見放されていないんだという、この気持ちを真っ先にメッセージとして伝えるべきだ」と。その後、医療はどうでしょうか、食べるものどうでしょうかという、何ができるかという話が続くんじやないか、というのが私たちの1つの考え方ですね。で、この時も長田区の方々の反応はそうでした。

そして私たちはフランスのNGOを1つ受け入れたんですけども、彼らは不思議だと言うんですね、なぜこんなに整然と並んでるんだと。不思議だと言いますから、じゃあパリで同じような地震が起きたらどうなるんですかと言ったら、彼らは一言「ライオット」と言いました。ライオット (riot) というのは暴動ですね。パリだったら暴動が起きてると言いました。どうしてですかと聞くと、やっぱり貧富の格差が激しいのでこういう状況になると暴動が起きると。でもあの人たちが知らなかったのは、町内会がこの時動いてるということですね。国際的な災害の現場では必ず登録というのをやります。年齢、人数、男女というのを登録して、1人当たりこれぐらいスペースが必要だ。そして1人当たりこれぐらいの飲み水だと、5歳以下の子どもがこんなに密集してたらワクチンはやらないといけないとか。全て登録から対策が出るんですけども、彼らが不思議だったのは全くそういうことなしに、整然と救援活動が進んでる事実ですね。これはフランスになくて、日本にある1つの組織、町内会という組織ですね。

日本人はこの時にボランティア元年と言いましたけども、そうでなくて、昔から地域コミュニティーの活動をやっている各種団体があります。町内会だとか、婦人会だとかいう、団体ボランティアなんですね。ところが阪神・淡路大震災で、どうしてボランティア元年と言われたかということ、それまでは個人で人のために色々やると、売名行為ということと言われてたんですね。私たちこの日までは売名行為と言われてましたけども、個人ボランティアが100万人から集まったということなんですね。すなわち団体ボランティアに加えて個人ボランティアというコンセプトが初めてここで出来上がって、それ以来、人のために援助するのは団体だけでなく、個人が自分の意思で自分の時間を使って、自分のお金も使ってやるのも立派じゃないかということで、売名行為という言葉が社会から消えたんですね。これが非常に大きいことですね。相互扶助は世界に通用するコンセプトだというのはここで私たちは発見したし、ロシアの鉄のカーテンが「困った時はお互いさま」というコンセプトで開いたわけですね。1996年2月、雲南で大地震があった時も、この説明をしたら中国の竹のカーテンが開

いて、私たちの飛行機は雲南省の昆明に着くことができたわけですね。こういうふうに、なぜ私はあなたを助けるのかということを説明するときに一番無理がなく答えられるのが、私たちが日ごろやっている相互扶助なんだということですね。

【ローカル・イニシアティブ】

そして次に説明したいのが、援助を受ける側にもプライドがあるということなんです。私たちがこのレッスンを学んだのは、1992年にロヒンギャというイスラム教徒の方々がミャンマーから隣のバングラディッシュのコックスバザールに、12万から20万人逃げてきました。その時私たちは初めて緊急救援チームを出したんですけども、コックスバザールに来てる難民の人たちのキャンプにです。いわゆる今流行りのテントでなくて、そのころはまだまだこういう国際的な難民救援活動というのがシステム化されていなかったので、彼らは竹で作った難民キャンプを自分たちで作って住んでるわけですね。この事実を知った時、私たちはすぐ国連難民高等弁務官のコックスバザール事務所に電話をかけたんです。医療チームを送りたいと言ったら、向こうからの返事は“*No more Japanese medical team*”なんです。日本の医療チームはいらないと。国連難民高等弁務官事務所が受け入れてくれないなら、難民キャンプでの医療はできないですね。そこで私たちが諦めていたら、次の日の新聞にあの有名な「国境なき医師団」がバングラディッシュの首都のダッカ空港で1週間足止めされてるという記事が見えたわけですね。「えっ」と思ったわけです。あの「国境なき医師団」が行くぐらいだから、現場の医療ニーズはあるに違いないと。とっさにこう判断しまして、もう国連難民高等弁務官がイエスとかノーとか、もうそんなことは関係ないということで、医療チームを作ってバングラディッシュに送り込みました。そうすると私たちのチームがダッカ空港に入ると3時間で空港をパスしました。バングラディッシュの中でNGOの活動をやろうと思いますと、NGOビューローというところに登録するのにだいたい3カ月かかるんですけども、それも3日間でパスしました。そして、バングラディッシュのメディアが熱烈歓迎のキャンペーンをやってくれて、バングラディッシュは国連難民高等弁務官のコックスバザール事務所にAMDAの医療チームを受け入れなさいという、こういう勧告で私たちの医療チームは活動できました。

なぜかということですね。それは私たちの医療チームのリーダーが留学生のバングラディッシュ人だったんです。その時彼は東京大学の外科の大学院で勉強していました。私たちはバングラディッシュのことがわかりませんので、すぐ彼に頼んで医療チームを編成してもらって、日本からは医師とかを送り込んだわけですね。すなわち私たちが学んだのは、バングラディッシュがどんなに困ってても、自分の自国の医師が海外から駆けつけて帰って来ることは熱烈歓迎なんです。援助を受ける側にもプライドあるという、AMDAの人道援助の第3原則を学んだのはこの事実からなんです。それ以来私たちは大災害が起きても、その国の医師団を、イニシアティブを持たせて海外から支援するという方法を取りだしました。バングラディッシュの時の医療チームリーダーの彼はその後日本の留学生生活を終えて、今バングラディッシュのダッカで病院を成功させております。日本バングラディッシュ友好病院といって、80床です。20人のドクターで病院経営をやっています。日本語も通じます

から、みなさん行かれたらいいと思うんですけども、申し上げたように、どんなに困ってても援助を受ける側にもプライドがあるんだと、そのプライドをどのようにして満足させるかということに関しては、その国の医師にチームを任せてやるのがいいと。

もちろん私も「国境なき医師団」は非常に尊敬していますし大先輩ですけども、彼らのやることと私たちのやることで、もし1つ違いがあるとしたら、彼らは絶対にイスラム教の人たちをプロジェクトリーダーに据えることはないということです。私たちはその国の医師をプロジェクトリーダーにしていきます。ここはたぶん1つの大きな違いになるんじゃないかと思います。私たちは、国境はないとかいうことは言いません。なぜならば、国家主権というのがありまして、その国家主権の中で一番大切なのが、命に関わる法律と、お金、税金に関わる法律なんです。これだけはどの国も持っています。したがって、いかに相手の国が悲惨なことになっても、勝手にずかずか入り込んでいくということは基本的にやらない。どんなに困ってても相手のイニシアティブを誘発してそこを支援するということです。私たちはこういうローカル・イニシアティブという活動をやってるんですね。それは1992年の時に私たちが学んだ、援助を受ける側にもプライドがあるんだということなんです。

【ローカル・イニシアティブと血縁共同体社会】

次に、血縁共同体社会というのを私たちが再認識したのは、2004年のスマトラ沖大地震ですね。この時は28万人の人がインド洋周辺で死んで、何百万人という人が被災者になりました。これはもう深刻化、イスラムの人もヒンズーの人も神は自分たちを見放したのかという論調があちこち新聞に出ていました。モスクはコンクリート造りですから全部破壊されました。アチェ（スマトラ島北端の州）にも総合病院が5つあったんですけども、3つまでがこの津波によって破壊されて、2つだけ残ったんです。その内の1つは職員の半数以上が津波で死んだために機能不全で開いてない、唯一残って開いていたのが陸軍病院なんですね。私たちは次の日から陸軍病院で手術を始めました。日本政府も重装備の手術ができる緊急医療チームを送り込みました。各国も送り込んだんですが、残念ですけどどの国も最初のうちは手術をしたくてもできなかったんですね。なぜAMDAのチームだけがこういう手術を即日からできたのか。すなわち軍の病院と、これ院長ですね、私たちはすぐ一緒にやれたのかということですね。

これは血縁共同体社会の凄さなんですけども、私たちのインドネシア支部はセレベス島といってスマトラから3000km離れたところにあるんですね。そのチームをここに送り込んで、それからあと12カ国、カナダとかニュージーランドとかいろんな国の支部からぞくぞくと送り送り込んで、延べ100人以上の医療スタッフを送り込んだんですけども、いの一に私たちが唯一残っていた陸軍病院で手術ができた理由ですが、100年前にセレベス島のスルタン、スルタンというのはイスラム教の指導者ですが、このスルタンとアチェのスルタンが結婚しているんですね。すなわち親分同士が結婚しているから、その下の者は全部兄弟・家族という関係なんですね。アチェの軍人たちは、私たちの支部がセレベス島から来たということで、すぐに受け入れてくれたわけです。すなわち、100年前に自分たちのスルタン同士が結婚した関係が現在も活着しているということなんです。私たちは必要な物資を

スマトラのメダンからどどんとトラックで運び込みましたけども、この時もセレベス島とアチェと人間関係のある医師たちがメダンで手配してくれました。

■ なぜローカル・イニシアティブってことを言うかという、インドネシア全土に血縁共同体社会の根が張り巡らされてるんですけども、これは私たち日本人にはわからないんですね。ところがいざこういう大惨事が起こった時に、血縁関係がある人が災害を受けた時にそれを助けないということは、掟破りになるわけですね。だから必ず動くわけですね。そうすると今まで見えなかった人間関係がブワッと上がってくるわけです。そうするとなまじか日本に居て、日ごろから他の国で災害が起きたらどういう人間関係で動こうとか、そんなものはいくらリサーチをかけても本当の姿というのはわかりません。それよりも、災害が起きた時は頼むよという絶対的な信頼関係でグッといく方が、彼らも本気になってくれるんですね。今まで地下に隠れていた、地下水の脈がぱっとこういう時に上がってくるわけです。そして非常にいい活動ができたということで、私が申し上げたいのは、血縁共同体社会というは恐るべし、ですね。

● ABCD包囲陣で中国と戦って日本は負けましたが、日本は中国と言え、中国本土の方だけだと思って一生懸命兵を進めたんですけども、実は「オーバーシーズ・チャイニーズ(Overseas Chinese)」と言って、華僑の方々がそれぞれアジアで成功されてるわけですね。その人たちが非常に影響力を持っているのですが、日本人はその影響力がわからなかったわけですね。だからあっちこっちで日本軍というのは、オーバーシーズ・チャイニーズの方々の現地における影響力と兵力によって非常に痛い目にあわされてるわけですね。それは血縁共同体社会なんですね。日ごろはあんまり仲がよくなくても、自分たちの一族に悲惨なことが起こることになったら血を継ぐ者として全部動くわけですね。こういった血縁共同体社会というのがアジアにずっと張り巡らされてる。だから中国は、中華圏どこに行っても、それはもう全て、インドネシアでもフィリピンでも華僑の人がおられます。そういう人たちを含んだコンセプトなんですね。血縁共同体社会としての大中国文化圏ということになると、非常に私も納得いきますし、このインドネシアだけでも3000km離れた、一番極端な、両極端でも婚姻関係がかつて100年前にあったんだという、その事実だけでもこれだけ動き回るわけですから、これを日本人が知らないんですね。知ったとしても、問題は、どうしたらこの人たちとご縁が結べるか、ということなんですね。あるのはわかっている、血縁共同体との付き合い方を知らない日本人が、この中に入り込ませてもらえるのか。あるいは、こういった時に一緒に協力をさせてもらえるのか、ということですね。その余地は十分あります。それは「企業秘密」ですから今日は言いません(笑)。

【市民参加型人道支援外交一事例を通して】

■ そして市民参加型の人道支援外交ですね。外交ということなぜわざわざ言ったかという、やはり世界平和のためにはいろんな政策提言をしていかないといけないというのが1つあります。そしてもう1つは、日本が国際社会で積極的にそういうことを進めようと思うんだしたら、日本を好きになってもらわなきゃいけない。日本は世界で最も嫌われてない国なんですけども、最も好かれてる国ではないんですね。そうすると、日本が世界平和に対して積極的にやろうと思うと、嫌われてないという

事実は大いに活用できますけれども、少しでも世界の人たちに好かれてもらうために、そういう努力をするのが外交だということで、外交なんですね。市民参加型というのは、市民が参加することに3つのことが言えます。すなわち、政府ができないから市民がやるという考え方が1つあります。そして政府と市民が一緒になってやるということもあります。そして最後は、市民だけでやれるということですね。これが市民が参加する外交の3つの意味です。

1999年に、タリバンとその時争っていた北部同盟を岡山に呼んだことがあります。この例は政府と市民が協力した例です。今米軍もたぶん、タリバンと妥協するか、あるいはタリバンから追い落とされるか、そういう瀬戸際に何年かありますけども、1999年にタリバンの公共福祉大臣と、北部同盟の外務副大臣のアブドラ氏——この人は先般カルザイ大統領と大統領の座を争って途中で降りた人なんですけども——このお二人がこの神戸に来たならわかりますけども、世界のどこにあるのかわからない岡山に来たんですね。私が言いたいのは、こういう和平交渉は今まで、だいたいジュネーブで行われますけれども、世界の人が知らない岡山で出来たという事実なんですね。

なぜ彼らが来たかということですが、その理由は1つだけですね。アフガニスタンとういのはこの時、国中が40年間の内戦によって難民キャンプのような状況だったんですね。難民キャンプでは今でもそうですけども、たくさんの子どもが死んでいきます。子どもが死ぬ大きな理由には3つありまして、1つは風邪をひいて栄養状況が悪い中で肺炎になって死んでいくのが30%。そして不適切な水を飲むことによって下痢を繰り返して脱水症で死ぬというのが30%。もしワクチンを飲ませてたら死なずに済んだものを、という子どもたちが30%なんですね。それで私たちが何を提言したかというところ、全てのアフガニスタンの子どもたちにワクチンを接種するまで、タリバンと北部同盟は戦闘行為を中止しませんか、ということでした。この提言をしたら、両方ともがOKして日本に来たわけですね。岡山に来た。なぜ来たのかと言うと、大人にとって子どもはどういう存在なのかということなんです。大人にとってどちらが政権を握っても、子どもが死ぬと、次の世代を担ってくれる子どもが死ぬということですが、大人にとってはこれは絶望ということですね。絶望状況だけは防ぎたいということでした。それで来たわけですね。

もう1つ重要なことは、この子どもたちは絶対自殺をしないんですね。日本では小学生でも自殺をします。なぜ、無い無いづくしの中でどんどん死んでいく子どもたちが自殺をしなくて、日本の豊かな中の子どもが自殺をするのか。私も色々考えましたけれども答えは1つですね。大人が自殺をするから子どもも自殺するんです。すなわち、イスラム教の厳しいアフガニスタンの難民、イスラム国家もたくさんありますけども、中でもイスラム教徒として非常に厳しい戒律を持ってやっているアフガニスタン難民の親たちにとって、自分の生活がどんなに困ってもその解決法の1つとして自殺というのはないんですね。だから子どもも自殺しないんです。ところが日本ではなぜ毎年3万人からの人が自殺するのか。以前は保険金は自殺に払われなかったんですけども、最近は保険金が自殺に適用されるようになったんですね。すなわち、お金の返済をしなきゃいけない時に自分が自殺することによって保険金で払うということが可能になってから、自殺が増えてるんですね。で、問題解決の1つとして日本人は自殺をするわけですね。そうすると親が自殺という方法論を持ってれば、子どもがそれを

見て自殺するわけですね。すなわち、文化とは、子どもが親を見て学んでいくわけです。自殺をしない親の元にある子どもは自殺しない。でも自殺というものを解決方法として持って、それを実行している親の子どもたちは、それも解決方法として学んでいくということですね。

● 難民の子どもたちに将来あなた方は何になりたいですかと夢について聞くと、だいたい2つの答えしか返ってきません。1つは医者になりたい。看護婦さんになりたい。なぜならば、毎日たくさんの子どもが死んでいく事実を見てますから、自分が大きくなったらお医者さんになって、看護婦さんになってこの子どもたちを助けてあげたいと言う。過酷な現実の裏返しですね。もう1つは学校の先生になりたいと言います。子どもというのは知的好奇心がありますけれども、勉強できない、学べない。じゃあ自分が大きくなったら学校の先生になって、この子たちに教えてあげようとする。すなわち、夢というのは現実の裏返しなんです。大人にとって子どもは希望。絶望の反対。子どもにとって現実、夢の反対ということで、私は希望と夢という言葉は使い分けた方がいいと。そして絶望状況を恐れるからタリバンと北部同盟が岡山まで来て、子どものためだったらワクチン停戦をしてもいいと。こういう事実を知っていただきたいし、そして、2004年に開かれたアフガン復興支援会議は、本来だったらドイツで開かれるはずだったと思うんですけども、日本で開かれ、この時タリバンと北部同盟の彼らは外務省に来たのでした。そしていろんなことを話し合った。それがたぶんに起源になって、第1回のアフガン復興支援会議は、このアブドラさんを中心とした外務調査の関係で、日本の東京で開かれたと。これは、民間の私たちと、すなわち市民の私たちと政府とが一緒になってアフガニスタンをどう持っていくかという、協力した例ですね。

● 次に、日本政府とこれも民間が協力した例なんですけれども、2003年の1月に、明石康さんという人ですね、よくご存知だと思いますが、カンボジアとかボスニアで和平を日本の特命全権大使の形で、国連の関係としてもやられた方なんですけれども、この方からで電話がかかってきまして、昨日スリランカの首都のコロンボから帰ってきたんだと。そしてノルウェーの和平を受けて19年間の内戦を停止して、スリランカの復興支援を日本政府がやることになったと。ついてはAMDAにお願いがあると。どういうことですかと言うと、スリランカには、政府側とタミールとイスラムの3つの勢力が相争っていると。日本政府はどのグループに対しても公平に支援するメッセージが必要なんだと。AMDAに日の丸の旗を立てて、それぞれの地域で巡回診療をしてくれないかということで、わかりましたと私は受けました。

● その時に私たちがやったのは、この3つのグループに対してなぜAMDAが来たかということの説明することでした。あなた方が困って、日本政府から頼まれたからAMDAが来たんですよ、というような説明では絶対受け入れないということはいくつかわかっていますから、もう1回私は歴史を調べて、歴史の中から相互扶助の理由を探しました。私はこう言いました、3つのグループに、ですね。1951年にサンフランシスコの講和会議で、あなたの国の財務大臣、後に大統領になる人が日本の戦後賠償はいらないと言われたんですよと。そしてその理由として、憎しみは憎しみで解決できないと。憎しみを解決できるのは愛だけであると。そしてスリランカは日本の良き隣人であると。だから戦後賠償はいらないと。こう言われてますよねと。その時私は1946年生まれでしたから、5歳でしたと。そ

の時の自分の生活を省みると、米がないからおからを入れたりとか、さつまいもを入れたものとか、ただメリケン粉を落としただけのすいとんとか、そして牛乳が飲めないので山羊の乳を飲んでいましたと。そういう貧しい状況の中で、戦後賠償はみんなの税金なんです。その時は税金を払うのは非常に難しい中、そしてその税金によって戦後賠償が払われるんですけども、あなたの国はそれをいらないと言ってくれましたね。これは日本にとってもものすごく大きなことだったんですよ。そして現在あなた方が困っておられるから、私たちは来たんですよ。すなわち、困った時はお互いさま。そして将来、もし阪神・淡路大震災のようなことが日本でまた起こったら、ぜひ来てくださいよ。こういうふうに私が説明しましたら、この方たちが言ったのは、それをテレビで喋ってくれというわけですね。私は、いやそれは明石先生の役目で私は喋りませんとお断りしましたが、スリランカの国は今貧しいんですけれども、日本の歴史は2000年ですね。ところがスリランカは5000年の歴史を持っています。そして2000年も前に非常に栄華を誇った文化、こういうものがあるわけですね。現在貧しいからといって単に助けますと言ったんでは、やはり援助を受ける側のプライドも、彼らが輝かしい歴史を持っていれば持っているほど、そのプライドというのは非常に大きいわけですね。その中でなぜ私があなただ方を助けに来たのかということの説明しなくてはけません。

そうした時に私が一番残念に思っているのが、文部科学省が大学入試から世界史を外したことです。そうすると、これからもし国際社会にみなさんが出られる時に、歴史を知らないという時間的な中における助け合いというものが出来ませんね。ある国に支援に行くと、なぜ私は来たのかという説明ができない。だから、世界史が入試に関係なくても、本当に国際社会に出て行こうという人は、相互扶助で、もしなぜ私はあなたを助けるんですかということの説明したければ、絶対に世界史を勉強して、相手が納得してくれてこちらを受け入れてくれる相互扶助のストーリーを作らないといけません。したがって、国際協力の3番目の、「援助を受ける側にもプライドがある」は、これはもう歴史にヒントがあるわけですね。昔から賢い人は歴史に学ぶ。愚かな人は自分の経験だけで学ぶと言いますが、本当に人の役に立ちたいと思った場合は、やっぱり歴史の中にストーリーを見つけていかなきゃいけないということですね。

国家が崩壊したハイチの地震でも、医療チームを送って行ったんですけども、安全が保証をされていないとNGOってのは活動できません。私たちは国連軍と組んで活動しました。NGOがこういう時に活動しようと思った時、軍と組まなきゃいけないということがあるわけですね。その時に自衛隊は離れたところで活動をやってたために、私たちは自衛隊の保護は受けることができませんでした。そのためPKOと言って国連が送り込んでいた軍が保障するコンパウンド（居住区）というのがあります。その中の病院で中南米、インド、ネパールなど7カ国から延べ35名のドクターを送り込んで足の切断手術を何件となくやりました。神戸の時はこういう状況はなかったですね。ハイチでは、瓦礫に埋まった人を掘り出さなくて、しかも暖かいので人間の体が腐って臭いが街中に立ち込めてるんですね。神戸の時は冬だったんで街全体が冷蔵庫のようでこういう状況はありませんでした。そんな中で私たちは救急医療をやったんですが、ハイチというのは非常に貧しくて、普通だったらこの手術をやる緊急救援は2週間で済むんですけども、2カ月かかったのは病院の機能も非常

に低くて、単に打撲とか骨折じゃない、傷口が膿んでどんどん上に上がってくるんで、命を助けるために足を切らなきゃいけない例が多かったですね。2ヶ月間で、各国のチーム合わせて4000人の方の足を切ってるわけですね。それで、国連が国際社会に出した8項目の支援の中に1つは義足というのがありまして、私たちAMDAも初めて義足プロジェクトをここで始めました。こういったケースの場合の国と市民との関係を考えて、どうしても国の助けがなければできないということで、こうした治安悪化してるところで人道支援をやりようと思っても市民だけでは絶対できないと。そして日本は軍に対するアレルギーありますけども、軍でないとできない場合もあるんだというのが、これなんです。

そしてもう1つですね。逆に国じゃなくて市民だけでやった方がいいというのが、交流スポーツなんです。ドミニカとハイチは歴史的にもものすごく対立してます。ハイチという国は世界で最初の黒人の独立国家なんですけども、隣のドミニカを占領したりしているんですね。今ではドミニカの方が経済的に豊かで、ドミニカの人がハイチの人を蔑視してるんですね。こういう歴史があったんですけども、30万人の方が1回の地震で死んだわけですね。広島原爆で、あの一発で28万人の人が死んでるわけですね。すなわち広島の方が1発の原爆で殺されたように、1回の大地震でそれ以上の人たちがハイチで死んだわけですね。そしてたくさんの被災者が出たということで、隣の国の敵対関係にあったドミニカの人たちは、今回はドミニカからハイチを支援しようと、こういう気分が盛り上がった時に、私たちは日本の少年サッカーチームを送り込んで、ドミニカとハイチと日本と3カ国でサッカーをやったわけですね。その理由はですね、ハイチという国が立ちあがるためには、復興支援というのはやはり団結がなければいけないんですけども、このサッカーというのはすごい団結力があるというのは、この前のサッカーワールドカップの例からもわかります。タコのパウロが予言したようにスペインがどんどんどんどん勝ち進んでいきました。タコが正しかったのか、タコが何を言ってるのかわかりませんが、あの時スペインで起きたものすごい現象は、スペインはそれまでバスク州というところで独立分立運動があって、時々テロをやったりしたんですけども、どんどんスペインが上位に上がって優勝が近づくにしたがって、スペインの人たちが一体化していったということです。そうするとこのバスク独立運動の人たちが、もう自分たちは武力闘争を放棄すると、これからは話し合いでいくと、こう路線転換したわけですね。

そこまでスポーツというのはみんなの求心力を集めるもので、それを私たちはハイチの少年たちにぜひ体験してもらおうと。このドミニカとハイチとの敵対関係、そして子どもがなぜ相手を馬鹿にするのかといえば、それはもうはっきりしています。親が馬鹿にするから子どもも馬鹿にするんですね。なぜならば、ドミニカの子どもはハイチに行ったことないのにハイチの人を馬鹿にするというのは、親が馬鹿にするから子どもが馬鹿にするんですね。親が自殺するから子どもが自殺するわけですね。だから、小学校、中学生の時からお互いに肌と肌を触れ合うような、そして相手を生で理解できるようなチャンスを持つというのが一番いいと、それはもうスポーツだろうということで、サッカーを取り入れたんですね。最初各国チーム対戦をやってる時は、まだしこりが残っていてぎこちなかったんですけども、今度は3カ国で合同チームを作ってやっとならぬうちにスムーズにいくようになりました。すなわち、

スポーツの威力ということで、私たちは今後、大災害の後の復興支援では積極的にスポーツというものを取り入れていこうと。そして中学生を対象にしていこう。そして日本の子どもたちも海外へ出て行ってもらう。それは別にサッカーだけでなく、空手でもいいし、柔道でもいいし、ドミニカ共和国では剣道もやりましたが、あるいは音楽でもいいわけです。そしてたいい大災害の後は、各国のアーティストが、復興支援に向けて被災者を励ますために、音楽というのをやります。そういったもので人々の気持ちを1つにしている。これが日本が経済的な復興した1つの大きな理由であり、日本国民が団結したということですね。

だから団結することに使えるもの、一番にあるのがスポーツ、そして音楽。こういうものがやはり大きな、これは私たち専門家でなくて、むしろ医療やなんかの専門家よりも、こういうことに関してできる人たちがいいですね。この時も青年海外協力隊が12ほどやってくれたんですが、こういった支援では、神戸女子大の学生さんもコーディネーションができるわけですね。これがまた非常に復興支援に対して大きな団結力になってきます。これは日本が復興支援で成功した一番大きな理由です。すなわち、どうみんなが一体となって団結するのか、ということですね。特別に知識も何もありません。日本人であるという特性と、そして血縁共同体社会とか、その3条件を理解してもらった上で、なおかつこういったスポーツ交流というものをコーディネーションしていったらできるということですね。これは市民だけでできる国際協力ですね。

さらにもう1つの例ですが、チリで津波が起こりまして、暴動が起こったために戒厳令で軍隊が出ました。この時私たちが入って行ったんですけども、チリという国は30年前に軍人がたくさんの民間人を殺してるんですね。それで軍人は病院の中にも入れないんですね。入ると市民の冷たいまなざしがあるんですけども、私たちのプロジェクトによって、民間の医者と軍人が非常に一体となって活動ができたんですね。それはどういうことかと言うと、一番被害を受けたところは、チリの社会でも、白人の人と白人でない人たちの格差が大きいところだったんですね。そして一番被害を受けた漁村というのはその中でも一番最下層のとこなんですけども、戒厳令によって、大人の人たちに対する食糧と水というのは配給されたんですが、私たちが調査しましたら、一番被害を受けた白人でない人たちの、しかも漁村というところの乳幼児がまったく放ったらかしになってるという事実がわかり、この乳幼児を支援するプログラムを始めたんですね。

そうすると最初の、AMDAの「人道支援の3原則」の1つですね。誰でも他人の役に立ちたい気持ちがあります。でもその気持ちは、究極の弱者を何とかしようというとき最も高まるわけです。こういった一番貧しいところで、一番被害を受けたところの乳幼児が一番援助を受けてないんだということでプログラムをやった時に、この戒厳令下のチリの軍人の医療チームと民間の医師たちが協力してくれるという奇跡的なことが起こったわけです。そしてもっと奇跡的なことは、60年前の第2次世界大戦に、チリという国は日本側だったんですが、チリは1国でアルゼンチンとペルーとボリビアに勝ってるんですね。災害時にチリが国際社会の支援はいらないと言ったのは、実はアルゼンチン、ペルー、ボリビアの人は来ていないということを言ってるわけですね。その時に私たちのチームは、実は日本とボリビアとペルーの混合医療チームで入って行ったんですが、2年間チリで青年海外協力

隊員としてがんばっていたある看護師の方は、私たちが送り込んだ医療チームにペルーとボリビアの医者が入っていることを聞いて、顔面が蒼白になったんですね。なぜかという、チリの人たちが一番嫌いな、絶対来てもらいたくない医療チームがやって来たんですから。でも、このプログラムをやることによって、そんなもんは吹き飛んでしまいました。

つまり、こういった人道支援というものは、日常存在している社会的な差別だとか社会的な対人構造というのがあっても、本当に困ってる人を助けるんだという誰でも他人の役に立ちたい気持ちをぐっとひっぱり出して、そしてみんなが協力するという構造を創りだすことができるわけですね。そして、そういった歴史的な対立とか差別というものが緩和されていく。チリ政府が国際社会に支援はいらなと言ったのは、日本の援助がいらなと言ったんじゃないくて、アルゼンチンとペルーとボリビアが来てもらいたくないから国際社会にいらなと言ったんですけども、やはりそうすると日本政府も入れないわけですね。そういった時に私たち市民サイドが入って行って、こういう歴史的な対立というものを緩和させていくということが出来るわけですね。そしてチリの人たちは親日的ですけども、もっともっと日本を好きになってくれる。まあこういう構造ができてきます。

最後に、ハイチでは今、私たちの義足プロジェクトが進んでまして、もうすでに8名の子どもたちに義足をつけてます。これからもどんどんやっていこうということで、また岡山からも義足を作る人を派遣しますけれども、1月12日がハイチの大地震が起こった時、そして17日が阪神・淡路大震災が起こった時ですね。災害弱者という言葉が1995年の1月17日に出てましたけれども、今NHKが一番力を入れているのが災害身障者ということですね。すなわち、災害の時にこういう身体に不利益なダメージを受けた人たちは、その後社会から忘れ去られていると、それは良くないんじゃないかということで、今災害身障者という1つの新しいコンセプトをNHKがなんとかやろうとしてるんですね。で、私たちはちょうど1月12日と1月17日がほぼ重なりますので、来年(2011年)1月12日に合同慰霊祭をしますが、義足をつけたハイチの何人かの子どもたちに日本に来てもらって、阪神・淡路大震災の災害身障者の方々と会ってもらって、また「私たちはあなた方を見放してないよ」というメッセージをお互いにやってもらうとかですね。そういうことを考えています。もしご縁があれば、彼らが来ました時、交流と言った場を設定してもらってもいいと思います。

【おわりに】

今日最後に重ねて申し上げたいのは、一旦こういう大災害が起きますと、だいたいの人が、自分が見放されたという感情を持ちます。で、その時その人たちは絶望状況になっていきますけども、その人たちが一番欲しいのは、自分たちは見放されてないんだという、そういう確信が欲しい。そうすると、こういった国際協力の中、大災害に関しては特に技術もなくてもいい、何にもなくていい、ただ人間として、見放しませんよというメッセージを送るだけでいいんですね。英語に「マインド」と「スピリット」と「ソウル」がありますけども、マインドというのは理性的な精神ですね。スピリットは、社会的に私は教授として、私は母として、私は父としてといった、社会的な存在がスピリットなんですけども、ソウルというのはもう存在そのものに問いかける、それがソウルなんですね。そうすると、こ

ういった被害にあっている人たちはソウルの声として見放されたくないというのを出示てきます。その人たちに対して「私はあなたを絶対見放しませんよ」というのは別に技術も何もいらぬですね。人間としての立場で、見放しませんよというメッセージを送るだけでいいですね。これは誰でもできることですね。そこところが国際協力においては特に大切なんだということを、最後にみなさんお話させてもらって私の話を終わりたいと思います。どうも貴重な時間ありがとうございました。

(2010年10月16日)

※基調講演の記録に基づいていますが、文責は編集室にあります。